
夢追人たちの足跡～小説マジカルバケーション～

莉紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢追人たちの足跡〜小説マジカルバケーション〜

【Nコード】

N8475Z

【作者名】

莉紗

【あらすじ】

悲劇の戦争から15年後。国外れの小さな村から、歴史は動き出す。

ミルフィーユは大魔法使いグラン・ドラジェに連れられて、魔法学校ウィルオウイプスへ入学する。ある日、15人のクラスメイトと臨海学校としてヴァレンシア海岸へ。しかし大変なことが起こってしまう…

謎の生き物、飛び交う魔法、次々と明かされる驚愕の事実。

ミルフィークと15人のクラスメイトの真実を知るための旅が今、
幕を開けた…

キャラクター設定。(前書き)

夢追い人たちの足跡：でのキャラクター設定です。
ゲーム版知ってる方は内容が全く同じなので飛ばしちゃってください！

キャラクター設定。

ミルフィュー・レトウニア

今作の主人公。15歳の女の子。属性は水…最初はね。肩くらいの金髪に深い青の瞳、可愛らしい帽子。明るくて元気、底抜けに。あと足技も得意。精霊が見える。

カシス・ランバーヤード

16歳の男の子。属性は刃。剣の一族ランバーヤード家後継者。女たらし傾向有り…ってのは表面上？腰より下まで伸びた癖のある銀髪、紫の瞳。

ブルーベリー・レイクサイド

代々国王の側近として仕えてきたレイクサイド家のお嬢様。属性は水。ミルフィューと仲良し。体が弱い。15歳。ブルーベリー色の髪と瞳。

シードル・レインボウ

14歳の男の子、痛烈な皮肉屋。属性は美。芸術に関してはいわゆる天才。10歳で個展を開きました。カシスとは気が合う。金髪に黒い瞳。

ピスタチオ・メイプルウッド

ヴォークスと呼ばれる種族の少年。属性は木、語尾は「っぴー！」
学校での成績は…落第寸前。

キルシュ・ピンテール

15歳の男の子。元気いっぱい、属性は火。少し長めの金髪を後ろで編み込み（b y アランシア）、黒い瞳。この頃キャンディに夢中。

アランシア・スコアノート

15歳の女の子。キルシュとは幼馴染み。属性は音。黒髪に黒い瞳。ただ今キャンディに嫉妬中。楽器ならどんなものでも弾きこなせる、天才。

キャンディ・ミントブルー

13歳の女の子。属性は風。くすんだ金髪に水色がかった黒い瞳。ガナツシュー筋で、グラン・ドラジェがデザインした服をそつなく着こなしている。

ペシュ・ファーマー

愛の大使、という種族の女の子。クラスの中では一番常識に近い。属性は愛。とにかくかわいいのー！byミルフィユ

カベルネ・チープトリック

イタズラ大好きパペットの少年。属性は毒。語尾は「〜だヌ」。

兄のシャルドネが行方不明。

レモン・エアサプライ

ニヤムネルト属の格闘技一家に生まれた娘。属性は雷。とにかく喧嘩っばやい。ミルフィユとブルーベリーとは大の仲良し。

オリーブ・ティアクラウン

人の心を読むことのできる、11歳の気弱な女の子。属性は獣。深緑色の髪と瞳。ガナツシュを兄のように慕う。

シヨコラ・クラックス

マッドマンという種族。属性は石。のんびりマイペースで、ウィルオウイプスの近くの山に住んでいる。

カフェオレ・ラストイネイル

喋る古代機械。属性は古。12000年前に作られたらしく、グラ
ン・ドラジェが骨董市で2000ブルーで買ってきたとか。

セサミ・アッシュポッド

10歳の虫好き少年。キルシュの子分的な存在。属性は虫。金髪
前髪ぱつんに、緑色の瞳。

ガナツシュ・ナイトホーク

15歳の少年。属性は闇。クラスの成績はトップ。一人でいること
を好むが、面倒見はいい。3年前、キャンプから帰って来た姉が国
に捕まってしまった。緑がかった黒髪に、黒い瞳。

キャラクター設定。(後書き)

やっとかけた　！フルネームとか、覚えてませんでしたみんなごめん…

今知ったけどシャルドネってヴァニラの恋人だったんだねえ。
ううつ、切ないよ…

ではでは

そのはじまり 1（前書き）

書いてみたかったマジカルバケーション。なかなかマイナーなゲームでして。

でもすごくお勧めなんです！

よし、頑張って書くぞー！

真実を知る旅が 幕を開けた…

そのはじまり 1

この世は多くのプレーン、すなわち世界、が重なって出来ている。火のプレーン、水のプレーン、闇のプレーン…。

その一つ、物質のプレーンに存在する魔法王国、コヴォマカ。そこでは人々が自分に合った属性 風、火、古、雷、水、獣、木、音、美、刃、毒、虫、愛、石、闇、光 の魔法を使って生活をしている。ある者は火を、ある者は獣を。

人々の大半は知らなかった。魔法は精霊の力を借りるからこそ成し得る奇跡だということを。

強い力に目が眩んだいわゆる「上級魔法使い」たちは次々と人ならぬもの、「エニグマ」と融合していった。エニグマの操る闇の魔法は、光以外の魔法に対し強い力をもつのだ。しかし人外の力を扱えた人間はほんのわずかで、大半はエニグマに意識を乗っ取られてしまった。人間と融合したエニグマは様々なプレーンを行き来することが出来るようになり、ついにコヴォマカで戦争を起こした。多くの魔法使いや兵士が戦ったが、エニグマの放つ闇魔法は強力だった。多くの命が、儚く消えていった。しかしコヴォマカ国の政府は「魔法の実験が失敗したのだ」と国民に事実を隠した。エニグマの存在を知られてはならなかった。よもやこの世が人ならぬものに征服されてしまうであろう恐怖など。

そんな国に対し怒りに拳を震わせたのは、一人の魔法使いだけであった…

悲劇の戦争から15年後。国外れの小さな村から、歴史は動き出す。

「またあいつだ。」

「変だよなあ、精霊だって。」

「居るわけ無いのにね。」

子供たちが遠くから見つめるのは15歳の少女。肩まで伸びた金髪はあちこちに跳ね、深い青をたたえた目はキラキラと輝いていた。

「おはよう！みんな。今日もいい朝だね。」

何も無い空間に手を伸ばす少女。

「今日も精霊さんとお喋り？」

「ミルフィーユには精霊さんが見えるんだよねー、すごい。」

子どもたちがキャハハハ、と笑う。ミルフィーユと呼ばれた少女はしょんぼりと地面を見つめた。その目には石の精霊が映っていた。落ちていた木の枝には木の精霊が宿っていた。

ミルフィーユは両親の顔を知らない。物心つく前に叔父の家に預けられたのだ。叔父は男手一つでミルフィーユを育てようとした。しかし彼女が5歳になる前にこの世から去ってしまった。原因は…「魔法実験の失敗」による怪我。何も分からないままミルフィーユはこの世に一人、放り出されたのだ。

「ミルフィーユ。」

叔父は死ぬ直前、彼女を抱きしめながら言った。

「魔法使いになる上で避けては通れない門、それが『エニグマ』だ。しかし彼らを恐れるな。お前には何か特別な力がある。多くの精霊たちの力を借りて生きるのだよ。」

叔父の亡くなった夜、初めて一人で寝た。寒くて暗くて何より不安だった。

そんな時だった。ミルフィーユの手を何かがくすぐった。

「…っ！」

ガバリと跳ね起きる。目の前に居たのはライオンと魚をくつつけたような可愛らしい生き物。水の精霊フロアだった。その日から彼女の眼には精霊たちが見えるようになったのだ。

「そっだよ、みんないるの。魔法はね、精霊さんがいるから存在出来るんだよ。」

どうせ信じてくれない、でもいい。私だけでも、彼らと仲良くして
いきたい。ミルフィーユはにつこり笑って言った。

「…のわりに、お前魔法使えねーよな。」

「パパやママに教えて貰えばいいのにねー。」

キヤハハ、と子どもたちはまた笑って走って行った。

「お父さんやお母さん、どんな人だったんだろうね。」

ミルフィーユはぼつりと呟いた。フローは優しい眼で彼女を見つめていた。

そのはじまり 1（後書き）

いやー、魔法のシステムとかなかなか難しいなあ。ドラクエと違って魔法主だもんね。まあなんとかありますか。うわー！すごい今わくわくしてます。

そのはじまり 2 (前書き)

突然現れた大魔法使いグラン・ドラジエ。
優しく微笑んで彼は言う。

さあ、全てが始まる時だ。

ミルフィーユの過去編、完結。

そのはじまり 2

「君は、精霊が好きかい？」

ハツとして顔を上げると、いつの間にか年老いた紳士がミルフィーユの前に立っていた。

少し滲んでいた視界を瞬きして治し、元気な声で答える。

「ええ！」

「もつと精霊と仲良くなりたいかい？」

「ええ！もちろんよ！」

ミルフィーユには見えた。老紳士の周りに飛び交う精霊たちが。

「君は…いや、何も言うまい。まるで磨かれていない原石を見つけた気分だ。」

嬉しそうに笑う老紳士を不思議そうに見上げた。ぼん、と頭に手が載る。

「そう、君はまるで磨かれていない原石だ。」

魔法を、この世界の本質を、学んでみようとは思わないかい？」

「…？」

夢にまで見た魔法。薪に火を着けたり、風を巻き起こしたり。

親が子へ教えることが多く、ミルフィーユは魔法を習うことが出来なかったのだ。

「私は魔法学校ウィルオウイスプ校長、グラン・ドラジエ。」

につこりと微笑む老紳士。

「え、え、えええええ！う、うそお！」

こんな、こんな普通の！？あの大魔法使いグラン・ドラジエ…。

コヴォマカに魔法を持ち込んだ人と言われ、「魔法実験の失敗」が最小限の被害で済むように走り回った魔法使いである。

「何もそんなに驚かなくても。さあ、君をウィルオウイスプへ招待したいのだが、如何かな？」

気がつけばコクリと頷いていた。グラン・ドラジエは笑顔で彼女の

頭を撫でる。

「私の学校を出た者の多くは国の要職に就いている。しかし私はそんなことのために魔法を教えているのではない。」

蒼灰色の瞳がミルフィューを見つめた。

「私が君に教えたいのは全て。この世の全て。全てを学び終えたあとの君は、世界を意のままに操ることが出来るだろう。」

深い青をたたえた瞳が見開かれた。ついでに小さな口も。老紳士は口元を綻ばせた。

さあ、全てが始まる時だ。

そう呟いた口調は、大好きだった叔父にそっくりだな、と思いながら老紳士グラン・ドラジェの後を追うミルフィューだった。

そのはじまり 2（後書き）

いやーマジバケ知っている人がいた！すごく嬉しい！ただ感動！
読んで下さった方々、ありがとうございます。

次からやつと現在（？）に入ります。ヴァレンシア海岸レッツゴー！
あ、その前にキャラクター紹介書かなきゃね。

今年最後の更新かなあ。一応書いておこう（^^）

良いお年を…来年もよろしくお願いしまーす！

そのはじまり 3 (前書き)

さて、キャンプ当日になりました。
マド先生クラスみんなは天才です。

そのはじまり 3

多くの生徒が通うなか、あたし、ミルフィーユが所属することになったのは担任がマドレーヌ先生のクラス。他に15人のクラスメイトがいる。みんな、校長グラン・ドラジェが直々に学校へ招待したらしい。…この事が地味にすごいと思うのはあたしだけ？まあそれだけあってクラスはとても個性的。代々コヴォマカ王の側近として仕えるレイクサイド家のお嬢様ブルーベリーや、剣術を極める刃の一族、ランバーヤード家のカシス。詩や絵画に興味を持ち、10歳で個展を開くほど類い稀な才能を持つシードル、音楽一家に生まれ楽器ならほとんどを弾きこなす、天性の才能をもつアランシア。かとおもえば、マッドマン 身体が土でできている熊の様な種族だのシヨコラやパペット 魂の入った人形 のカベルネ、愛の大使 ペシユ、ヴォークス 犬と人間の中間の様な種族 のピスタチオといった人間ではない者もいた。極めつけは喋る古代機械カフェオレだ。骨董市でグラン・ドラジェが見つけてきたらしい。最初は驚いたし、自分はここに在るべき存在じゃないと思った。このクラスにいるみんなはいわゆる「天才」だったから。

いや !あたしが悩むなんて性に合わない っ！
よっしゃあ、極めてやろうじゃないか魔法とやらをさ！

んで気付けば、ウィルオウイスプへ入学して数カ月が過ぎてた。

「ミルフィー！ピスタ！バスが来るぜ！」

「ひゃっほー！！キャンプだぜ！」

いやにテンションが高いキルシュとセサミが教室に入ってきた。

「オイラ、キャンプなんか行つてられないっぴ。落第して家に連れて帰られちゃうっぴ。」

目の前の魔動人形、カラマリイを睨みながらヴォークスのピスタチ

オが言う。

「ピスならだいじょーぶよー」

「ミルフィは能天気すぎるんだっぴー！オイラの立場も考えるっぴー！
「何やってるの？もうすぐ出発よ。」

優等生のお嬢様、ブルーベリーが親友のレモンと共に歩いてきた。

「ホント、お前らグズだよなあ。なんとかなんねえのか？」

ニヤムネルト族 猫と人間の間のような種族だ らしい男勝りな口
調でレモンが口を開けば、

「あたしもグズ ！？レモンちゃん言うね ー」

「なんだってえ！？俺がグズならピスタチオはどうなるっ！」

「おいっ！」

突っ込む一同、落ち込むあたし、燃え上がるキルシュ。しかし彼も、
「おはよー！みんなここにいたんだー。」

キャンディには一途である。

「あれーカラマリイ？誰か補習？」

カラマリイはウィルオウイスプが所有する魔動人形^{マジックドール}で、成績下位者
はこれと闘い、負けたら落第なのだ。

「オイラ落第はいやだっぴー！強くなつてカラマリイにも、キルシ
ュやミルフィにも勝てるようになりたいっぴー！」

「んじゃさ、今からのキャンプでヴァレンシア海岸にいくでしょ？」
くるりとキャンディは振り返って、

「みんなでめいっばい魔法を鍛えようよ！それでガナツシュにも勝
っ！」

「うはっ！目標高いね。」

「ミルフィーユ様が何をおっしゃる。」

「ガナツシュには敵わん！あいつ絶対いつか倒す！」

「……おい、ガナツシュはラスボスじゃないぞ」

「目標が高いのはいいがせめてキルシュにしとけよ。」

「どういう意味だよ！俺に勝つのは大変だぜ！」

「それなら私も少し体を鍛えようかな。走り回る皆を見てるだけじ

やつまらないし。」

「はははは、目標かぁ。私は、うーん、告白かなぁ。告白できたらいいなぁ。」

「ドキッ!!」

飛び上がるキルシュ。みんな分かりやすいねえ。

「来たぜ来たぜ!アニキー!」

「キルシュも!?あ、アランシアにか。聞くまでもないよねー。」

「あ、アランシア!?いや、アイツとはただの幼馴染みで。」

「お互い頑張ろうねっ!」

キルシュ沈没。

「キャンディは誰につぴ?」

「男の子にはないしょ!今夜海岸のコテージで女の子だけで話そっ!」

相手はきつと　ふふ、あいつだな?

「さんせー!」

あたしと、ブルーベリー、レモンの声が重なり、うわーっと全員で教室を出た。

そのはじまり 3 (後書き)

これ、光のプレン行くまでに8話くらい費やしそっ…
長々すぎかなあ？

ううー。

そのはじまり 4（前書き）

こちらは少しお久しぶり！

音楽室の会話編。

カシスとシードルのコンビ大好きだ…

さて、もうすぐ魔バスが発…するか？

そのはじまり 4

「こんなところでなにしてますの！バスが来てますの！」

可愛らしい愛の大使ペシユが飛び掛かってきた。

「ゴメンゴメン。話が盛り上がったちゃって。」

抱きついたペシユをひっぺがす。あー可愛いわあ。愛の大使…って
いう種族らしいけどすごく可愛い！　ただし愛の大使の男の子
は不細工らしいね。あはは

「ヒョアアア！」

喋る古代機械カフェオレが二階から掛け降りてきた。

「オンガクシツデ、ミンナガコワイハナシヲスルンダ。」

「いいからバスに行くですの！ミルフィちゃん、音楽室の皆をお願い
ですの！」

「んじゃあたしらは先行つとく。またバスでね。」

「はいはい。」

元気良く返事をして音楽室に向かった。

「そんなのウソだよ。」

小さな赤い帽子が金髪によく映えるシールドルが言う。

「だってそれが本当なら…」

「毎年のようにヴァレンシア海岸に行くわけないってか？この時期
には毎年門が破壊されるって言うし…絶対に何かあるぜ。」

口が悪いのは腰を悠に過ぎた癖のある銀髪が目をはく、カシスだ。

「キャンプで毎年誰かがいなくなってるのが本当だったら…じゃあ
誰がいなくなったのさ？」

「ガナツシユの姉さんが…三年前、キャンプから帰ってきてすぐ
家出しちゃった。」

オリーブが深い緑の瞳が弱々しく揺らしながら言った。

「でも、キャンプとは無関係じゃないか。」

あちゃー、こっちでも違う方向で話が盛り上がったちゃってますか…

音楽室に入っても、話に夢中で誰一人気付かないし。声掛けようにも掛けられないー！…否、訂正。アランシアだけはハープを弾くのに夢中だ。

「わかったわかった、ガナツシュに聞けばいいんだろ？ガナツシュはどこさ？」

「アイツが家族の話なんかするワケねえだろ？キャンプもフケる気だぜ。」

「うそっ！」

「カベルネに聞けばいいんじゃないの？」

「あの子来ないの？」

「カベルネに？あれ、カベルネもどこさ？」

「おい。」

「行こうぜ、ミルファイが呼びに来てる。待たせちゃ悪い。」

「無視すんなっ！」

ミルフィーユのこうげき！！ミス！！カシスにダメージを与えられない！！

「ごめ。」

カシスとシールドが揃って言う…笑顔で。絶対悪いと思ってない面白がつてるぞこいつら。

「んーいいよー…あとは、カベルネ？」

彼なら…ああ、下の教室か。階段を降りて左手の大教室に5人は向かった。

予想通り、カベルネは大教室の一目、定位置で物思いに耽っていた。

「よっ、カベルネ。また兄貴のこと思い出してたのか？」

「又々。ガナツシュの姉キは学校をやめたあとも、時々この教室にオレの兄キに会いに来てたんだ又々。」

紫色の瞳がゆらゆらと揺れる。

「でも『ヴァニラは様子がおかしい、何かあったんだ！』って追いかけて行っただけ、帰ってこない又々。」

「もしかして……泣いてたの？」

アランシアが心配そうに問う。

「そんなこと無いヌー！」

「お兄さんのこと、思い出してたのね……。」

オリーブが優しく言った。

「さあ、行こ！みんなで。」

「そうだ、行こうぜカベルネ、海に行つてパーツと忘れちまえ。」

「バスの中でたっぷり話をしようよ。」

シードルの言葉にカベルネは大きく頷いた。

そのはじめり 4（後書き）

うわー！ミスター！！と今気づきました。

はい、女主人公の名前についてです。お気づきの方いらっしゃるかもしれません。

…はい、トルーナ村でのサブキャラ。ミルフィーユでしたね…ううっ
トルーナでは「ミルフィ」と記述させて頂きます。

悲しい！忘れてた！自分的にミルフィーユ（パペットの）とティ
ラミスは大好きなのに…ううっ

と落ち込みつつ。そろそろ挿絵というのも入れてみたいと思った休日でした。

ありがとうございます！

そのはじまり 5（前書き）

長くなつてすみません、やっと今回で出発します。

その前に少し…ね

オリーブの予知能力びびびー！！

今回から「夢追人の手帳！！」を記録していきたいと思います。

マジバケ知らない方にも楽しんでいただけたらな、と思いつつ。
いざ しゅっぱーっ！

そのはじまり 5

「……っ！ミルフィ、職員室に寄らせて！」

突然の声に飛び退く。いつもは静かなオリーブのことだから余計に。

「どした？」

「マドレーヌ先生の…心の声…。」

彼女は人の心が少しだが、読める。

「落ち着いて。」

「残り半分の生徒を、生徒を見捨てる…？」

ガタガタと震えるオリーブ。あたしはその小さな体をそつと抱き締めた。

「誰か、彼女をバスまで。職員室見てくる…！」

「俺も行く！」「ボクも。」

「でもそれでは生徒が…。」

「わしは、君なら出来ると信じておる。」

校長グラン・ドラジェと担任のマドレーヌが話していた。

「しかし…危険すぎます。」

「だからクラス全員とは言わんのだ。強い魔法使いが必要なのだ。軍には信頼できるほどの力はない。」

「見捨てるのですか…？」

「彼らなら大丈夫じゃ。危険なのは重々承知しておる。…急がねば15年前の悲劇の再来となるのじゃ…！」

黙りこくるマドレーヌ先生。あまりのことに呆然としているとカシスに手を引っ張られた。

「おい！大丈夫か？」

「ただのキャンプじゃない？見捨てる？一体何が起こるっていうんだろ…」

「このキャンプは危険な香りがする」。魅力的だからといって手を

伸ばせば棘で刺される、薔薇のように。」

「シードルの才能にかかれば何でも詩的に……っても、ガナツシュ、本当に来ない気？」

「ああ、さっきの話聞いてたのか。」

「少しね……二人とも先にバスへ乗ってて、あたし行ってくる。……彼ならいざという時に頼れるしね。」

走り去るミルフィーユの後ろ姿を見送るカリス。

「そうだよな、お前ならそうするか。俺じゃまだまだか。」

その顔に浮かぶ彼らしくない表情に気付けたのは、なんやかんやあつても気が合うシードルだからであつた。

一帯に流れる切なきハーモニカの調べ……全身を黒で統一した少年は木の下で一人、ハーモニカを吹いていた。

「こんな所にいたのね。」

「……っ！」

少年が目にしたのは、可愛い帽子を被った少女。

「ミルフィー、か。驚いた。」

「お姉さまのこと、考えてた？」

「ああ。」

遠くを見つめるガナツシュ。その横顔はとも同じ学年だとは思えない、闇を抱えていた。

「ガナツシュ、キャンプ来ない？」

「そのつもりだ。どうせ何もないさ。」

「ダメだっ！来いっ！」

……え、ミルフィーってこんなキャラだったか？

「オリーブの様子が変なの。マドレーヌ先生の心を聞いてから。……あたしにだって分かる。これから何かが起こる。」

「姉貴が消えたみたいにな、か？」

「わからない……。」

やだ、弱気な自分なんて…。

気付けば自分の声が震えていた。

怖い。

「みんな…いなくなってしまう…助けて、怖いよ。」

ガナツシユは静かにあたしの肩に手を置いた。

「分かった、バスはどこだ。」

そう言つて微かに笑った。

かくして、バスは出発した。マドレーヌ組16人全員を乗せて。学校の門を破壊しちゃったのは…カシスの表情が面白^{かお}かったなあ。シールドはまた歌い出すし（自作だけどね）、キルシユとキャンディはテンション凄いし。これから起こることを誰が予想できただろう。未熟な子どもたちが予想できるはずがなかった。

そのはじめり 5（後書き）

夢追人の手帳！1ページ目は「マジカルバケーション」

担当は私、莉紗です。えつとですね、マジカルバケーション、通称マジバケは…2001年12月07日、BROWNIE BROWN（ブラウニーブラウン）から発売されたGBA版ソフトです！BROWNIEとは働きの妖精のこと。CMには若き日の中島美嘉が出演。びっくり。「最も強い武器は『友情』だ」のキャッチコピーのもと、美しいグラフィック、個性豊かなキャラクター、そして何より感動的なストーリーで、発売10周年を迎えた今でも人々を魅了し続けているゲームなのです！私がドラクエとともに愛して止まないソフトです。

いかがでしたか？こんな風に続けていきたいと思えます。担当は各ページで変わる予定！内容は…ふふふ

ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8475z/>

夢追人たちの足跡～小説マジカルバケーション～

2012年1月14日21時56分発行